博士学位論文審査要旨

２０２０年7月１１日

論 文 題 目： 地域包摂型ツーリズム・ビジネスによる過疎地域活性化の実践的研究
－三重県津市美杉町における Inaka Tourism プロジェクトを事例に－
学位申請者： 中川　雄貴
審 査 委 員：
主　査： 総合政策科学研究科　教授　　今里　滋
副　査： 総合政策科学研究科　教授　　井口　貢
副　査： 総合政策科学研究科　准教授　佐野　淳也

要　　旨：

わが国では地方中山間地の過疎化や高齢化の進行に歯止めがかからない。筆者が宿泊施設を経営する三重県津市美杉町もそのような、しかも合併によって独自の政府機能を失った、地域の一つである。本論文は、筆者が自らの宿泊施設を地域内外のアクターが結集する核と位置づけ、そこで、Inaka Tourism プロジェクト等の革新的な地域包摂型ツーリズム・ビジネスを展開することにより新たな地域活性化のモデルを創造せんとした実践的研究の成果である。

本論文は７章で構成されている。第１章で研究の動機、目的および方法を述べた後、第２章では、美杉町の中心産業であった林業の衰退とそれに伴う人口動態の推移、その過程で生じた若者の流出等の地域課題の現状を分析し、合併後の津市による地域振興策にも言及している。

第３章では、日本の観光産業の発展史を概観した上で、とくにニューツーリズムと呼ばれる動向に着目している。そして、その動向を牽引するのが地方での体験型観光のニーズが強いインバウンド観光客であることを数々のデータから明らかにし、そうした観光客を地方に滞留させる宿泊施設や体験プログラム開発の重要性を指摘して、Inaka Tourism の発想を導き出している。

第４章は先進事例研究である。長野県飯山市と飯田市、長崎県小値賀町、大分県宇佐市安心院町、由布院温泉観光協会のそれぞれの取り組みの独自性や地域活性化モデルとしての汎用性を具に検討している。なかでも、イタリアのファッジョーリ農場における現地調査は特筆に値する。

第５章では、前章の事例研究から導出した仮説としての美杉モデルを理論構成する作業を行っている。筆者はそのモデルの概念枠組の構成要素として、中間システム、その機能を具体化する地域プラットフォーム、収益事業性、「よそ者」、観光資源としての地域文化と地元学を検証している。

第６章では、エスノグラフィーの形式による社会実験としての三つの実践プロジェクト―美杉むらのわ市場、Onsen×Ninja Experience Package プロジェクト、および「Inaka Tourism プロジェクト―形成と展開過程」の記述と第５章で構成した概念枠組を使っての有効性に関する考察を行い、宿泊施設が核となった共存共栄の革新的美杉モデルが創造できたと結論している。

最後に、第７章では、美杉モデルが創造され適用されていく過程をソーシャル・イノベーションプロセスとして位置づけ、これまでのソーシャル・イノベーション理論を批判的に援用しつつ、島根県海士町の自治体主導型モデル等と対比させることで美杉モデルの独自性を論証している。

本論文の核心である美杉モデルが過疎に苦しむ地域を活性化できる収益事業として機能できるのか、残念ながらコロナ禍でその実証が中断したという課題は残るが、それはソーシャル・イノベーション研究としての独自性を阻害するものではない。よって、本論文は、博士（ソーシャル・イノベーション）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０２０年7月１１日

論 文 題 目： 地域包摂型ツーリズム・ビジネスによる過疎地域活性化の実践的研究
－三重県津市美杉町における Inaka Tourism プロジェクトを事例に－
学位申請者: 中川 雄貴
審 査 委 員：
主 査： 総合政策科学研究科 教授 今里 滋
副 査： 総合政策科学研究科 教授 井口 貢
副 査： 総合政策科学研究科 准教授 佐野 淳也

要 旨：

学位申請者に対する総合試験は、2020 年 7 月 11 日午前 10 時 45 分から午前 11 時 45 分まで、公聴会方式により、口頭試問を実施した。総合試験では学位申請者が約 30 分間論文の概要についてのプレゼンテーションを行い、その後約 30 分間、学位申請者と審査委員との間で質疑応答を行った。

審査委員からは、美杉モデルが島根県海士町等他の先進事例と比較してどのような理由にもとづきその独自性を主張するのか、美杉モデルにおいては地域の歴史や文化がどのように位置づけられ、活用されているのか等について質疑があったが、学位申請者の応答はいずれも満足のいくものであり、中川氏の十分な研究能力と専門知識を確認することができた。

また、外国語能力については、とくにソーシャル・イノベーションプロセスに関する文献資料を中心に英語文献を利用しており、その理解、引用、参照においても誤りがないことを確認し、研究に必要な外国語能力は十分であると判断した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 地域包摂型ツーリズム・ビジネスによる過疎地域活性化の実践的研究
－三重県津市美杉町における Inaka Tourism プロジェクトを事例に－

氏　　名： 中川　雄貴

要　　旨：

本研究の目的は、わが国、又は海外の過疎地における地域活性化モデルとなっている事例について、その成功要因を客観的に分析するにとどまらず、事例研究によって得られた知見を参考にしつつ、三重県津市美杉町という過疎化が進行する「何もない」地域を研究対象として、宿泊施設を核とし地域内外のセクターを繋いだ、革新的な地域包摂型ツーリズム・ビジネスの主体的創造を地域活性化のための仮説として措定し、その仮説を社会実験によって証明し、成果としての「美杉モデル」を提示することである。

第１章では、筆者が三重県津市美杉町のリゾートホテルの４代目経営者として生まれ、過疎に悩み基幹産業が衰退した町において、宿泊施設の社会に対する意義を考え、研究に至るまでの動機、目的、方法、構成を述べた。

第２章においては、三重県津市美杉町の現状を理解するために、美杉町の加速度的に進む人口減少問題を日本の人口減少問題と比較した。次に、その原因には基幹産業である林業の衰退が挙げられるとした。そして、美杉町の観光資源や美杉町における津市の取り組みに触れた上で、新たな産業構造が必要であるという課題を認識した。

第３章においては、観光産業の動向と現状について分析を重ねた。観光形態は時代と共に大きく変化している。また、国内市場は伸び悩んでいるが、インバウンド市場は順調に増大している。さらに、観光が及ぼす経済波及効果にも触れ、その影響力の大きさを確認した。加えて、国内旅行における新しい需要として、より地域に根ざした旅行需要があり、海外においても、日本の歴史・伝統文化体験、日常生活体験、自然体験ツアー・農漁村体験など、地方部の強みといえる体験を望む需要があることが分かった。また、日帰りと宿泊を伴う消費の比較、地元調達率を示し、宿泊施設が地域に存在することの優位性を確認した。

第４章においては、事例研究として、信州いいやま観光局、南信州観光公社、おぢかアイランドツーリズム協会及び小値賀まちづくり公社、安心院町グリーンツーリズム研究会、ファッジョーリ農場、湯布院のモデルを分析した。いずれの地域においても運営を担う中間システムとなる組織が存在した。収益事業を有している組織も存在し、それぞれの町やケースに合った方策をとっていた。また、地元学の考えに通じる取り組みであるということも共通しており、その理念と実践をもとにまちづくりが展開されていた。多くの事例で地域外の出身者が中心となって活躍していることも分かった。

第５章においては、実践プロジェクトに向けた理論考察を行った。ツーリズムによるまちづくりについて、中間システムとして地域資源に働きかける地域プラットフォームの必要性、さらに、組織を持続的に発展させていくための収益事業が重要であるとした。また、よそ者についても触れ、その中でも地域内よそ者という、越境者の視点をもつ地域住民が特に重要な存在であるとした。さらに、経済と文化の両立が重要であるとし、地元学、宮本常一や井口による観光文化論と、地域内再投資力やLOIS（Local Ownership and Import Substitution）などの地域経済論の分析を重ねた。その上で、内発的発展論を分析し、創造のプロセス、コミュニティの三要素、伝統の再創造、経済的にみた内発的発展の特性について論じた。これらが有効的に作用することで、地

域包摂型ツーリズム・ビジネスが確立されるとした。

第6章では、3つの実践プロジェクトの形成過程において、エスノグラフィ形式で述べた。美杉むらのわ市場は、町の入り口となっており、美杉町内外、様々な人と人を繋ぐ場として機能していた。そしてその出店者数、来場者数、売り上げの分析や関係者へのヒアリングも行った。僻地における市場ではあるが、採算性と持続性を確認することができた。その上で、市場は一過性のイベントに過ぎず、日常的に美杉町に足を運ぶよう促すことのできる取り組みの必要性を述べ、市場で培ったネットワークや発掘したコンテンツを活かしたInaka Tourismプロジェクトへと繋がっていくとした。Inaka Tourismプロジェクトにおいては、誕生のきっかけとなった、広域連携によるテーマ型体験コンテンツであるOnsen & Ninja Experience Packageにより得た運営ノウハウを活かした。初期段階では森林セラピーなどのヘルスツーリズム、ウエルネス概念を軸にしたイベントを起ち上げ、それらの集客、売り上げ、アンケートなどから分析を重ねた。そして、採算性を重視した価格設定でも集客が可能との判断を得た。そこから、さらに地域を巻き込んだ取り組みとするべく、地域住民、事業者、行政をメンバーに据え、Inaka Tourism推進協議会を起ち上げた。体験事業者や宿泊事業者と連携し、共存共栄のモデルであるMisugi Village＝Hotel構想を始動させた。様々な体験に加え、農家民宿や民泊のプロデュースに美杉リゾートが関わるというものである。本来ライバルとなる他の宿泊施設と連携し、体験の販売に加え、宿泊施設としての機能を活かし、客室販売の代行、仕入れの共有、送迎、言語、緊急時対応などを行う。それらに手数料を得ることで、お互いにメリットを享受するという独自のビジネスモデルである。そして、先述の様々な理論が有効的に作用していることを確認し、これを「美杉モデル」とした。

第7章では、知見の整理と総括をした上で、谷本ほかのソーシャル・イノベーション・プロセスモデルと、Murray, Caulier-Grice and Mulganのそれを比較した。

谷本ほかのモデルは地域活性化事例をソーシャル・イノベーション・プロセスの創出（①社会的課題の認知、②ソーシャル・ビジネスの開発）と普及（③市場社会からの支持、④ソーシャル・イノベーションの普及）の二段階に分けて分析している。

これに対して、Murray, Caulier-Grice and Mulganはソーシャル・イノベーションのプロセスを6つに分類している。①イノベーションの必要性、課題の特定（Prompts, inspirations and diagnoses.）、②アイデアの生成（Proposals and ideas.）、③試作、試験操業（Prototyping and pilots.）④アイデアの実践、維持（Sustaining.）、⑤拡大、拡散（Scaling and diffusion.）、⑥システムの変化（Systemic change.）である。

Murray, Caulier-Grice and Mulganのモデルを美杉町の事例に当てはめてみる。①については、美杉町は基幹産業が衰退し、新たな産業構造が必要であるという課題を認識した。②については、美杉むらのわ市場、Onsen & Ninja Experience Package、Inaka Tourismプロジェクトの形成過程において、2度の研究構想発表会という場や旅行会社を招いてのファムトリップを通して、さまざまなステークホルダーや有識者の意見やアドバイス、気づきなどを得て、アイデアが生まれていった。③については、美杉リゾートが主体となり、Inaka Tourism推進協議会を設立し、Misugi Village＝Hotel構想という事業構想にたどり着いた。そして、体験コンテンツの作成や農家民宿や民泊のプロデュースに携わり、受入体制を整備していった。また、海外メディアのファムトリップなどを通して試験操業を繰り返した。④については、実際に体験や宿泊客の受入を開始し、短い期間ではあるが着実に実績も積み上げてきた。⑤については、現在「美杉モデル」が業界内でも注目を浴びつつあり、講演など登壇する機会が増えてきている。今後、さらなる実績が積み上がり、それが他地域での応用にまで広がっていけば、⑥の領域まで到達すると考えられる。

その上で、より多様なソーシャル・イノベーションを反映させられるのは、Murray, Caulier-Grice and Mulganのモデルであるとした。

Nicholls and Murdock は、住民セクター、企業セクター、公共セクターの3つに分類し、その境界線は不明瞭で、制度上の論理を超えたところで、協働が起きるとしている。Mair and Marti は、そのセクターの間で非政府組織、すなわち政府の機能に関して代理国家として「影の国家」が機能することを例示した。

さらに、高橋・木村・石黒は、本来変革主体とはなり得ない行政が主体となり、様々な事業を遂行し地域活性化へ繋げたというモデルを例示した。

これらを踏まえた上での、本研究の結論は次の通りである。美杉町は過疎化が著しい「何もない」地域である。そのような町において、一つの宿泊施設が中心となり、その範疇を超えて中間システムとなる。さらに、地域プラットフォームという機能を介して、地域住民、事業者、行政、大学など地域内外の様々なセクターやステークホルダーと関係性を築いていく。そして、宿泊施設としてのノウハウや機能を活かし、Misugi Village=Hotel 構想を実現するべく、本来ライバルとなるはずの他の宿泊施設と共存共栄のかたちをつくる。これら一連の取り組み・地域包摂型ツーリズム・ビジネスの展開により、地域文化を残し、地域経済を活性化していくことで、地域住民の生きがいや誇りの醸成にも繋がっていく。本論文の結語を、「この『美杉モデル』こそ、市町村合併により地域のサスティナビリティや活性化の機能を担うべき独自の政府を失った地域を、地域経済の革新的振興を通じて活性化していくひとつのソーシャル・イノベーションモデルなのである 。」と締め括った。

(4,000 字)